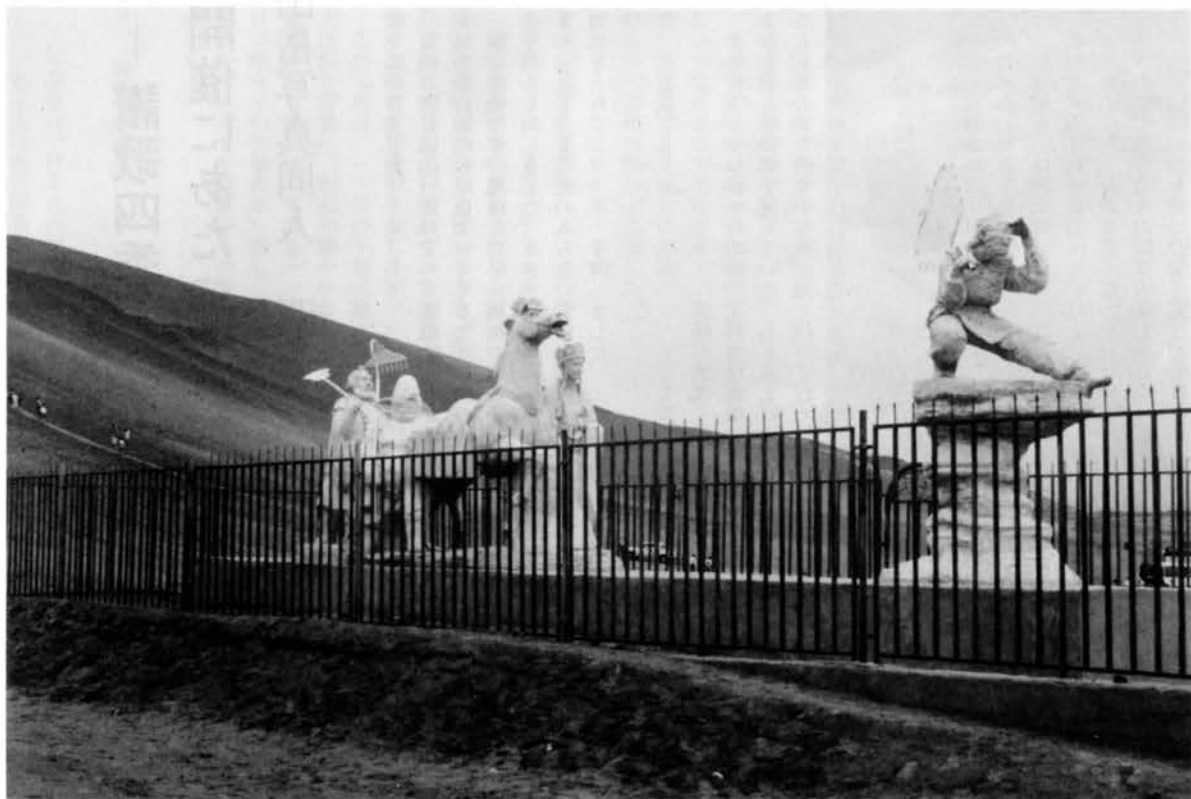


山と博物館

第44巻 第3号 1999年3月25日

大町山岳博物館



火炎山の麓に建つ西遊記の像 右端が芭蕉扇を手にした孫悟空
 (中国新疆 ウイグル族自治区トルファンに於て) 撮影 宮本 尚子

はるつらら

千葉 悟志

『山路きて何やらゆかしすみれ草』とは、あの松尾芭蕉が詠んだ句で、高橋(一九九〇)によれば、すみれ草とはタチツボスミレであったそうです。

それではと、博物館の池端でも見られるミズバショウ(水芭蕉)も、芭蕉に詠まれて由来したのでらうと、図鑑(牧野(一九八九))を開くと、『水気が多い湿地に生え、バショウ葉に似ていることから』とありました。バショウ(バショウ科)とは、中国原産の植物で、西遊記でも火炎山の牛魔王に化けた孫悟空が羅刹女から芭蕉扇を取り上げ、それを用いて火を消したというお話があります。

ミズバショウ(サトイモ科)の葉も大きいもので一メートルちかくにまで生長しますから、和名の由来も納得させられます。

本州中部以北、北海道および東アジアの寒地の湿原に生える多年草のミズバショウは、大きな花びらに見える白い仏炎苞が特徴的ですが、実は葉が変形したもので、苞葉と呼ばれています。それに包まれるようなかたちで花軸上に黄色の小さな花(両性花)が散りばめられたように咲いています。

県内でも奥裾花や梅池自然園などはミズバショウが多く生育し、写真に納める人、春を満喫する人と名所へは多くの方が訪れます。大町市にある居谷里湿原(県の天然記念物)でも、ザゼンソウに続いて、ミズバショウが次々と咲き誇ります。

その湿原や周辺の低山に訪れては、花暦というものを作成しています。月に三回、一人での作成ですが、時折吹く暖かな風が安曇野の春を告げるようで、のんびりとそして、植物や動物との偶然の出合いを楽しみにして。春はやっばりよいものです。

(大町山岳博物館学芸員)

参考文献

高橋 秀男(一九九〇) 野草大図鑑 北隆館
 牧野富太郎(一九八九) 牧野新日本植物図鑑 北隆館

4/17(土)〜5/16(日)

「我が心に映る山——讃歌四季——」

開催にあたって

山岳写真同人 四季

1、「初冬の剷岳」

林 朋房

一月末の休日を利用して扇沢から二、四二四mの室堂に入りました。この時期、天候に恵まれると真白く雪化粧した立山連峰の景色に会うことができます。剷御前小屋の脇にテントを設営して、明日の好天を願いながら



1、「初冬の剷岳」 林 朋房

積雪の大量井へは、私の登山技術としては登山者の多い年末年始を利用するしかない。ここから槍ヶ岳は特に美しい。新年を大天井岳の冬期小屋で迎え、雪をたっぷりかぶった「荘厳な槍ヶ岳」をフィルムに残すのがこのところの毎年の楽しみとなっている。山はいつも違った姿を見せてくれる。

眠りにつきました。

夜明け前に別山付近に立ち、青白い空間から東の空がしだいに色づいてくると、感動の一瞬が来光です。光はしだいに剷岳の荘厳な姿を照らし出しました。カメラに広角レンズをセットし、まだ光の入らない青白い剷沢の雪面を入れてシャッターを押しました。

2、「若葉のとき」

宮崎 典代

冬の積雪が少なかったのか、上高地は例年よりも少し早い春を迎えていた。ふと見上げると若葉の間を爽やかな風が通り抜けて行く。朝日がきらめき緑が目染みだ。

3、「風舞う稜線」

宮崎 典代



3、「風舞う稜線」 宮崎 典代



2、「若葉のとき」 宮崎 典代

日本のマッターホルンとも称されている槍ヶ岳。標高三、一八〇m、日本第五位の高峰は周囲の山々から眺めると凛々として美しい。しかし、槍ヶ岳の良さは登頂してはじめて実感するものです。槍の穂に立つと正に三六〇度の展望が楽しめます。四つの鎌尾根を従えた大景観は、お山の大将の気分です。この写真「滝雲流れる」は、山頂から西鎌尾根方面を狙ったもので、双六岳、三保蓮華岳、遠く黒部の源流の山々が見えます。

4、「槍ヶ岳への思い」

名取 洋



4、「槍ヶ岳への思い」 名取 洋

5、「朝日に輝いて」

井上のぞみ

山の魅力のひとつに高山植物との出会いが

あります。汗をかきながら重い荷物を背負って歩いても、美しい花々に出会うとほっとするものです。けなげに咲いている花々に心を奪われます。自然が作り出した色や形は、まさに至上の芸術です。

この高山の花たちの魅力を少しでも引き出せたらと、私はカメラを向けます。どの角度が一番美しいのか、一心に観察してシャッターを押すのです。



5、「朝日に輝いて」 井上のぞみ

6、「山稜の冬」

初冬を迎えた剣岳、立山、大日岳は、一面の銀世界でした。早朝は風の強かったこの稜線も、陽が昇るにつれて穏やかになり、青空の中に真っ白な峰々がくっきりとそびえていました。冬の山は、下界とは比べ物になら無

大石 高志



咲いているのかと尋ねてくる人もいました。

高志 三月上旬の上高地の大正池は私たちにすてきな造形を与えてくれました。薄く張った水面に積もった雪が風のいたずらか、森の妖精のいたずらか、団子状になった雪が散らばっていました。ファイン「山稜の冬」

大石 ダー越しの新しい世界。来る度に、新しい風景を見せてくれる上高地の大正池。私の大好きなところ

いほど厳しい世界です。

この日のように穏やかな天候では、すばらしい景色を見せてくれます。この写真のように、雪面にできる風との共演のシユカブラはひとつの芸術作品のようでした。

7、「雪稜を行く」

立山連峰の冬の始まりは早く、一月ともなると雪一面の世界に変わります。天候の変化は目まぐるしく、晴れていると思えば、すぐに猛吹雪に早変わりをします。

大石 高志

この写真は、一月の下旬に雄大な新雪の大日岳を背景に、別山の穏やかな冬の雪稜を仲間がのどかに歩いている一コマです。次の日は吹雪で山の様相は一変し、剣御前に設置していたテントを撤収しての下山は、一苦労でした。

8、「凍てる大地」

この写真は、見る人の想像力を刺激するらしい。ある人は航空写真かと言い、また花が

吉田 理子



7、「雪稜を行く」 大石 高志

9、「天突く鋭峰」

杓子岳は、稜線の縦走路から見ると頂上が平坦でおとなしそうな山に見えますが、その頂上に立って信州側をのぞくと、断崖が鋭く

川上 詔夫



9、「天突く鋭峰」 川上 詔夫



8、「凍てる大地」 吉田 理子



10、「折り折り樹」 安田 郁子

切れ落ち、ずいぶん違ったイメージの姿となります。

四月末、私は双子尾根に登り、山頂直下に幕営しました。翌朝の稜線は強い風が吹き荒れていましたが、次第にガスが吹き飛ばされ、晴れ渡りました。雪庇を踏み抜かないように細心注意を払いながらも、稜線から身を乗り出すようにして、鋭角にそびえる杓子岳の姿を捉えました。

10、「折り折り樹」

安田 郁子



11、「花に思う」 長尾恵美子

から里へと短い秋を競い合う、タペストリー
の宴のようです。

白い使者が訪れる頃、葉衣を脱いだ冬支度の樹々達。葉を落とした幹や枝も、柔らかな陽を浴びて風情があります。いつの季節も自分を主張し、ぬくもり感じさせてくれる樹々。自然の息吹を感じながら、その中に身を置くと、清々しく幸せな気分になります。

11、「花に思う」

長尾恵美子



12、「エメラルドの静」 中司 茂男

本格的に写真を撮るきっかけになりました。

その後山岳写真を始めたので、主に高山植物を撮るようになりましたが、山登りの途中に足元に可憐に咲く花々は疲れを癒し、心に優しさや潤いを与えてくれる大切な存在です。

12、「エメラルドの静」

ここ数年、撮影のための黒部の源流から下の廊下へいたるまで通いつめています。その中でもお気に入りの場所が、赤木沢出合です。

この写真は、黒部川・赤木沢出合にある瀧を題材として、溪流の碧色が醸し出す幽谷さを表現したものです。これからも、黒部溪流の織り成す水の流れと岩や樹林とのハーモニーを写真という静止画の中に表現していきたい。今年もまた、雪解けと共に僕の黒部通いが始まります。

12、「エメラルドの静」

中司 茂男

お知らせ

大町山岳博物館では「我が心に映る山—讃歌四季—」と題して、山岳写真同人 四季の会員による山岳写真作品を展示します。

展示する作品は一四〇点で、カラー一〇〇点、モノクローム四〇点です。期間は四月十七日(土)から五月十六日(日)までです。会場は大町山岳博物館ホール・特別展示室・教室で、常設料金での入場となります。

バックナンバーのお知らせ

次の巻の「山と博物館」バックナンバーがあります。内容は主なものの紹介ですが、どうぞご了承ください。

第37巻第11号(平成4年11月)

北アルプスにあった世界記録 原山 智

長野県・新潟県の

遺跡から出土したカモシカ 千葉彬司

第37巻第12号(平成4年12月)

座談会 山岳博物館の現状と将来

バックナンバーの請求方法

右記にご希望のものがありましたら、一部一〇〇円でおわけです。巻号と部数を明記の上、現金書留か口座振替で「大町山岳博物館宛」送金ください。(送料当方負担)

山と博物館 第44巻 第3号

発行 一九九九年三月二十五日発行

〒長野県大町市大字大町八〇五六一

大町山岳博物館

TEL 〇二六—二二—〇二二一

印刷 大系タイムス印刷部

定価 年額 一、五〇〇円(送料共) 切手不可

郵便振替口座番号 〇〇四〇一七—一三九三